

# あんな声・こんな思い

誰にでも居場所はある。  
自分の存在を認めてくれる場所、  
自分らしく居られる場所、  
それが居場所…。

## 人は人を必要としていることを 確かめ合う居場所

高齢者をはじめ地域の人が気軽に集まる「居場所」が、あちこちに誕生している。訪れた人がホッとできる雰囲気をつくるには、内装を明るい色にまとめたり、木をふんだんに使ったり、いろいろ工夫が必要のようだ。その立地条件、取り巻く環境も、見過ごすことはできない。とり

わけ学校や家庭に居場所がないと感じて傷ついている若い人たちには、「細やかな配慮が望まれる」そんなことを思いながら、商店街の一角にある、不登校やひきこもりの子どもの居場所づくりと若者の就労支援をしている「アンガージュマン・よこすか」を訪ねた。

「人は人との関わりの中で学び成長していく。社会的自立を目指すには、人里離れたところではなく、人の行き交う賑やかな所がいい」と、代表の小柳良さんらは考えた。のどかさの漂う昔ながらの商店街は、安全で、適度に人通りがあり、誰もが自然に出入りできる。

すりガラスの玄関は、学校に通えない子どもたちのためにフリースペースとして、週日は毎日朝から開放。また不登校か否かを問わず、学びたい子は誰でも必要な学習サポートを受けられる態勢を整えている。それぞれのニーズに応じるため、大勢の学生やボランティアやカウンセラーが揃えている。その他、ひきこもりの当人のみならず、親の会や、カウンセリングの勉強会、就労支援の講座、ギター教室と多様なプログラムが開

料、その他の家事手伝いは有料という取り決めもした。

「試行錯誤の連続です。話し相手が欲しくて用事を頼んだのに、話にならん、と叱られたり、仕事の途中で帰つて来ちゃう人がいたり。スタッフが付き添いますが、それでもなかなか難しいことが多い」と小柳さんは苦笑する。が、頭ごなしに押しつけるのではなく、適当な距離を持つて人と対応していくことを、経験を積むことで、ゆっくり身につけていけばいい、とおおらかに見守る。

地元商店街との協力が成功した秘訣は、土地柄というか、双方の人情のようなものにあったのではないか。環境や立地条件もさることながら、「居場所」にとって大切なのは、やはりこういった人の温かさ、寛容さなのかもしれない。



催されているため、さまざまな年代の人が出入りする。1周年記念誌によると、スタッフも含めて年間5千人以上の人人が集まつたという。昨年の暮れには、しめ縄づくりに挑戦して注文販売や配達もこなし、好評を得た。舗道の清掃や、催し物